沖縄津堅島方言の比較基準を表示する格助詞の機能について

又　吉　里　美

1．本稿の目的

本稿は、沖縄津堅(つけん)島の比較基準を表示する格助詞の機能について明らかにしようとするものである。比較基準を表示する格助詞として、沖縄津堅島方言ではjuka、tu、ɲiの三つを見出している。この三つの助詞について、結合する動詞、または形容詞、名詞との関係から、その機能を明らかにすることを目的とする。

格助詞は、多くは「太郎が行く」「花子にあげる」「学校へ行く」「筆で書く」などのように現れ、「名詞＋格助詞＋動詞」が基本的な文構造であると言える。したがって、動詞との結合関係を考えることが、格助詞の機能を明らかにすることに有用であると考える。しかし、本稿で取り扱う比較基準を表示する格助詞は、比較基準というその性質上、必ずしも動詞と結合するとは限らない。特に格助詞jukaは形容詞や名詞との結合が著しいと言え、また、自然傍受において、jukaが動詞と結合した文例を得ていない。接続の観点から考えると、jukaとtu、ɲiはその機能を別にすることは明らかなことかもしれない。しかし、tu、ɲiに結合する動詞も状態性や属性の意味性質を持つ動詞であり、先の形容詞とあわせて、これらは非動作性語彙としてまとめられる。したがって、本稿では、品詞形態論的な接続の観点からのみでなく、非動作性語彙の意味に注目し、格助詞との結合関係を捉えることによって、それぞれの格助詞の機能の分析考察を試みるものである。

なお、標準日本語の助詞「ヨリ」を論ずるときには、「カラ」との相関関係が問題とされ、比較論究されることが多いが、標準日本語の「ヨリ」に相当する津堅島方言のjukaには起点を表示する機能は見られないので、本稿では取り扱わないこととする。

2．先行研究

2.1　日本語および日本語史における諸研究

沖縄津堅島方言助詞のjuka、tu、ɲiは、標準日本語の助詞「ヨリ」「ト」「ニ」に相当するものである。標準日本語において、「ヨリ」「ト」「ニ」が比較基準を表示する機能として働くことは、多くの格助詞研究で言及されている[注1]。また、これらの格助詞は通時的、共時的な研究がなされている。

また、「ヨリ」に関して言えば、古代日本語において、「ユ」「ユリ」「ヨ」「ヨリ」の四つがあることが明らかとなっている。その出自には様々な説があるが、「後」を意味する名詞「ゆり」と関連づけ、その「ゆり」が転じたものが「ユ」「ユリ」「ヨ」「ヨリ」であるとする考え方が一般的である。また、「ヨリ」は上代において、多くの機能を有していたことが知られている。例えば、山田孝雄は、①動作の起点を示す、②進行活動の活動点を示す、③方便・材料を表す、④比較の基本を表す、⑤出自を表すの五つを挙げている。しかし、これらの機能のうち、現代口語に見られる用法は、④の比較の基本を表す用法だけであり、起点の用法が書き言葉として用いられる程度に過ぎない。それ以外の用法は室町頃までには「カラ」や「デ」などの他の助詞が代替するようになった。したがって、「ヨリ」の用法としては、現代の日本語では「比較基準」を表示する機能として落ち着いたと言えるだろう。

一方、「ニ」と「ト」に関しては、両者の相互関係が問題にされることが多く、山田孝雄をはじめ、多くの研究者がその機能の差異について言及している。「ニ」と「ト」との違いとしては「絶対的・相対的」「客観的・主観的」といったことが挙げられている[注2]。

2.2 琉球方言における諸研究

琉球方言において、比較基準を表示する機能を持つ助詞についての研究は、諸研究者による各地域の方言における記述的な研究が多く見られる。これらの研究により、琉球諸方言の比較基準を表示する助詞が明らかになっている。それらを参考に、琉球方言全体を見渡すと、比較基準を表示する機能を持つ助詞は、津堅島方言の助詞juka、ɲi、tuにあたる助詞の他に、津堅島方言助詞のŋkaにあたる助詞がその対象となる地域がある[注3]。このように、地域によって、用いられる助詞の種類に違いが見られる。しかし、jukaに動詞が結合することが見られないことや、tu、ɲiに結合する動詞は一定の動詞しか見られないなど、接続や機能としては、管見におよぶ限りでは、地域による違いは小さいように思われる。すなわち、これらの助詞の機能は、琉球諸方言において、安定した機能を持ち、ある一定の定型表現の構造が確立されているのであろうと思われる。以上のことにも言及しながら分析考察を行う。

3．津堅島方言における比較基準を表示する格助詞の実態

3.1 jukaの比較基準を表示する機能

jukaに接続するものとして、まず形容詞が挙げられる。以下にその文例を挙げる。なお、jukaは場合によりŋkaとなることがある。津堅島方言には存在場所を表示する格助詞ŋkaがあるが、そのŋkaとは用法・機能ともに異なる。

○e:miŋka waka:munna.／エーミンカ　ワカームンナ．／（孫が描いたAさん（70代）は）エーミ（孫）より若いんじゃないの（若く描かれているんじゃないの）？（of→of）

○ari deŋwatʃo:ŋka aʃikuna:ŋgaraja. deŋwatʃo:ŋkane.／アリ　デンワチョーンカ　アシクナーンガラヤ．デンワチョーンカネ．／（この本は）あの電話帳より厚くないかね。電話帳よりね。（of→of）

○misatoko:gjo:juka tu:wa… tu:wanne.／ミサトコーギョーユカ　トゥーワ…　トゥーワンネ．／（北部工業は）美里工業より遠い…遠いでしょ。（of→of）

形容詞述語文の特徴の一つは、「程度」を表示するということである。上記文例でも「若い」「厚い」「遠い」といった「程度」の比較が行われているものである。しかも、それらは話題のものを「比較基準」の対象と表示することによって、その程度を表す文構造である。つまり、「（話題Aハ）B＋juka＋adj」という文型を構成し、相対的比較を前提とする文構造である。そして、この場合、「話題A」は、既知情報として話し手および聞き手に了解されていることから、省略されることが多いが、文が意味する程度としては、A＞Bなのは、自明のことである。

また、形容詞文以外に名詞（＋助動詞）と結合する文型がある。この場合、「年上」「年下」ということが話題である場合がほとんどのようで、自然傍受では、それ以外の用法を聞き得ていない。「年上」「年下」ということが話題となる文例を以下に挙げる。

○ta:runtʃiŋka ʃi:ʤe:janro.／タールンチンカ　シージェーヤンロ．／タールンチより年上だよ。（of→I）

○waŋjuka mi:ʧe ʃi:ʤe.／ワンユカ　ミーチェ　シージェ．／私より三つ年上。（of→I）

○watta:juka ti:ʧe ʃi:ʤajaru ba:te.／ワッターユカ　ティーチェ　シージャヤルバーテ．／私たちより、一つ年上であるわけ。（of→of）

○kotta:juka tiʧina: ʃi:za:jaha:.／コッターユカ　ティチナー　シーザーヤハー．／これたちより一つ年上だよ。（of→of）

○ba:ʧaŋka ʧi:ʧe uttu….／バーチャンカ　チーチェ　ウットゥ…．／ばあちゃんより一つ年下…。（of→I）

○ii:n jurika:juka ti:ʧe utturanro.／イイーン　ユリカーユカ　ティーチェ　ウットランロ．／いいや、ユリカより一つ年下だよ。（of→of）

文型としては「（話題Aハ）B＋juka＋年上／年下」「（話題Aハ）B＋juka＋○つ（年齢差）＋年上／年下」となる。

その他、「あなたよりいい人はありません」のように、下に打消の語をともなって、限定を表す用法が見える。文例は次の通りである。

○ha: na:na:na:na: na:miɲi… na:mijuka mi:nu so:raije uranʧi na je…. ／ハー　ナーナーナーナー　ナーミニ…　ナーミユカ　ミーヌ　ソーライイェ　ウランチ　ナ　イェ…. ／ハー、ナーナーナーナー、あなたに…あなたより見える（会える）兄弟はいないと（言って）、もう、イェ…。(of→of)

これらのjukaの使用例を見てみると、jukaと結合するものは形容詞や状態性を表す名詞（句）であることが分かる。形容詞は状態性を表すので、jukaは状態性の語彙と結合すると言える。言い換えれば、jukaは非動作性語彙との結合力が高いと言える。

以上が、jukaの機能である。標準日本語と同様に、jukaは比較基準を表示する機能として、安定しているように考えられる。なお、先にも述べたように、起点を表示する機能は見られない。ただし、日本語において、語誌的に見ると、「ヨリ」の基本的な機能は動作・経過の場所や起点を示すのが基本的な意味であり、それらが転用されて比較基準を表示する機能を獲得してきたとされる[注4]。こうした通時的な過程を考えると、経過場所や起点を表示する機能をjukaが有していた可能性も考えられるだろうが、現在の津堅島方言において、その機能はkaraが担っている。すなわち、jukaは「比較基準」を、karaは「経過場所」「起点」を表示する機能として、その機能の使い分けが既になされている状況であると言える。このような状況は標準日本語のあり方と一致するものである。格助詞jukaとkaraのそれぞれの消長とその相互関係には興味深いものがあるが、それについては、機会を改めることとする。

3.2　tuの比較基準を表示する機能

tuは動詞「違う」「変わっている」の他、「同じ」を意味する「ユヌムン（同じもの）」と結合する。まず、tuと「ユヌムン（同じもの）」とが結合した文例を以下に挙げる。

○jo:saigakko:nʤi naraha:tu junumuɲjatakutu.／ヨーサイガッコーンジ　ナラハートゥ　ユヌムンヤタクトゥ．／洋裁学校で習ったものと同じものだったから。(of→I)

○nu:ga iʃikunutuʤi iʃikutu junumunruru.／ヌーガ　イシクヌトゥジ　イシクトゥ　ユヌムンルル．／なんで、いとこの嫁(は)いとこと同じものだよ。(of→of)

○watta: kajomitu junumuɲ na tumiranjo.／ワッター　カヨミトゥ　ユヌムン．ナ　トゥミランヨ．／私たちのカヨミと同じ(もの)。もう、探し求めないよ(結婚しないよ)。(of→of)

junumuɲは「同じもの」という意味である。junuは、首里方言ではinuであり、『沖縄語辞典』、『日本方言大辞典』で共に接頭辞として扱われ、次のように説明される。

'inu-（接頭）同じ。同等・同量・同様の意にも、同一の意にも用いる。非常に多くの名詞に付く。'inutusi（同年）、'inunaa（同名）、'inuQcu（同一人物）など。

国立国語研究所（1963.4）『沖縄語辞典』、p.266

いぬ〔接頭〕名詞に付いて、同じという意を表す。沖縄県首里「いぬとぅし（同年）」「いぬっちゅ（同一人）」((ゆぬ))沖縄県首 里石垣島「ゆぬむぬ（同じもの）」((いん))沖縄県首里

尚学図書編集（1989.3）『日本方言大辞典』上巻、p.207

すなわち、上記文例の構造は、「学校でならったもの」と「同じもの」、「いとこ」と「同じもの」、「カヨミ」と「同じもの」という構造で、「名詞＋tu＋名詞」という構造であることが分かる。すなわちtuが持つ「並列」を表示する機能に近い機能として働いており、その意味で「並列助詞」に近い機能であると言える。標準日本語において、「ト」は格助詞として古くから存在する格助詞である。また、並列を表示する機能は、『万葉集』において既に見られ、「ト」の並列を表示する機能が古くから存していることは、先人の研究より明らかな事実[注5]である。

津堅島をはじめ、琉球諸方言では、「同じ」という標準日本語のような形容動詞（古くは形容詞）の形態を用いず、接頭辞junu（沖縄首里方言ではinuなど若干の音韻変化がある）を用い、「同じだ」ということを表すときにはjunumuŋ「junu（接頭辞）＋muŋ（もの）」の形態で表す。すなわち、名詞の形態である。したがって、同価値の名詞と名詞とを結びつけるためにtuが用いられるのである。

ところで、語誌的な国語史の観点から考えると、標準日本語では、「同じ」という語は、もとは「～に同じ」というように、「ニ」格助詞をとるのが普通であったと言われる。しかし、徐々に「ト」格助詞も用いられるようになったという。こうした変遷は、格助詞「ニ」と「ト」の承接に関する文法上の問題として扱われたり、「同じ」の意味上の変化の問題[注6]として扱われてきた。

その一方で、津堅島方言の事象を鑑みると、格助詞の承接および機能について論究することは、やはり文法上の問題であると同時に意味上の問題であり、その両者の側面から考える必要があると言える。標準日本語の「同じ」と共起する助詞が「ニ」と「ト」の両方が可能であるということから考えれば、津堅島方言においてもjunumunに共起する助詞はtuとともにŋiが共起可能だと考えられる。しかし、実際に用いられる助詞はtuのみであり、ŋiが共起する文例を自然傍受では得ていない。これは、junumunという表現が「名詞」の形態であることが、その起因の一つとして挙げられる。標準日本語の「ニ」も列挙を表示する機能として、「名詞＋ŋi＋名詞」の構造をとることはある[注7]。この列挙の場合、「ニ」には動的な側面があると思われる。「ト」が「ＡトＢ」というように一まとめのものとして括ろうとするのとは異なり、「ニ」は次へつなげる意識を持つ。それは「ニ」が対立関係のものをつなげられないことからも考えられるだろう。すなわち、「朝ト晩」とは言い得ても、「朝ニ晩」とは言えないのである。これは、津堅島方言のŋiとtuにおいても同じである。

上記の考察から、junumuŋ（同じもの）という言葉が持つ「同価値」の意味は「列挙」表示の文中では機能し得ないのは明らかであろう。それは文法上の問題であると同時に意味上の問題でもある。したがって、津堅島方言においては、標準日本語のように、ɲiがjunumuŋが共起することがないと考えられる。

また、tuは動詞とも結合する。その結合する動詞として、「同じ」とは逆の意味を表す「違う」がある。そのほか、「変わる」という動詞が結合する。以下にその文例を挙げる。

○ʃakogai n ari ʃakogaitu ʃigati nu:natuga ari nu:ntʃi itʃuga.／シャコガイ　ン　アリ　シャコガイトゥ　シガティ　ヌーナトゥガ　アリ　ヌーンチ　イチュガ.／しゃこ貝、ん、あのしゃこ貝と違って、何なっているか、あの、なんと言ったか。(of→of)

○umanumuntu ʃigaiŋ.／ウマヌムントゥ　シガイン.／ここのもの（サーターアンダギー）と違っている。(of→of)

○aretu ʃigatene. ɸutsu:no arigwa:ga aijeja.／アレトゥ　シガテネ.　フツーノ　アリグワーガ　アイイェヤ.／あれ（大きい食用のアロエ）と違ってね。普通のあれ（アロエ）があるでしょう。(of→of)

○watta:ga ʤu:ninemme:nukututu kawatigaura….／ワッターガ　ジューニネンメーヌクトゥトゥ　カワティガウラ….／私たちの12年前のことと変わっているか（どうか）…。(of→of)

○ʃenʤentʃu:ja na: nʤi namatu panaʃi naraŋ.／シェンジェンチューヤ　ナー　ンジ　ナマトゥ　パナシ　ナラン.／戦前の人は、もう、ね？　今と話できない（戦前の人からしたら、今の世の中は話にならないくらい変わってしまった)。(of→of)

「違う」は「同じ」の逆の意味である。すなわち、「同じ」と同様に、「同価値」「同等」に関する意味を担うものである。また、tuはasa tu baŋ（朝と晩）のように対立概念を表示するときにも用いられるものである。すなわち、（Aハ）B tu ʃigatiということはAとBとは全く別のものであり、その意味において、対立関係にあるといえる。以上のことから、動詞「違う」にはtuが結合すると考えられる。動詞「変わる」も文例中の意味は「違う」と同じである。また、もう一つの文例において、namatu panaʃi naraŋ（今と話できない）との文例が見えるが、これも、文中での意味は、「今と話にならないくらい変わってしまった」ということが表されている。言い換えれば、昔と今が違っていることを表現しているのである。したがって、「変わる」は「違う」と同じ意味として機能しているので、「違う」と同様にtuが用いられるのである。

3.3　ɲiの比較基準を表示する機能

比較基準を表示する助詞juka、tuの他にɲiが用いられる場合がある。ɲiと結合する動詞

に「似ている」や「そっくりだ（真対だ）」がある。その文例は次の通りである。

○ja:mi inagunujaɲi ɲisugaja:.／ヤーミ　イナグンウヤニ　ニスガヤー．／あなた女親に似ているね。(of→I)

○satʃikoɲi ɲisugaja.／サチコニ　ニスガヤ．／サチコに似ているね。(of→I)

○jurika:ɲi ɲisuɲ.／ユリカーニ　ニスン．／ユリカに似ている。(of→of)

○aridʒi:saɲɲi ɲisuɲtʃijo. ／アリジーサンニ　ニスンチヨ．／あのおじいさんに似ていると言ってね。(of→of)

○he:ga ure ʃimabanana:ɲi ɲiusunro. guna:nuja.／ヘーガ　ウレ　シマバナナーニ　ニスンロ．グナーヌヤ．／だけど、これ、シマバナナに似ているよ。小さくてね。(of→of)

○a: kikunupa:ɲi ɲisuɲtʃina. kikuna.／アー　キクヌパーニ　ニスンチナ．キクナ．／アー、菊の葉に似ていると言ってね？（それで）キクナ（と言うのね）。(of→of)

○oka:saɲɲi mattatʃijagaja:. ／オカーサンニ　マッタチヤガヤー．／お母さんにそっくりだね。(of→I)

ɲiに承接する名詞は人だけではなく、「シマバナナ」「キクヌパー（菊の葉）」といった物質名詞にも承接する。標準日本語では、「～に似る」「～と似る」という二種類の表現が可能であり、鈴木英夫氏による論考[注8]も見える。

しかし、津堅島方言において、「～と似る」に相当する表現～tu nisuɲいう表現は聞かれず、動詞「似る」は、常にɲiと共起する。

また、そっくりを意味するmattatʃiもɲiと結合する。mattatʃiは、「真対」であり、日本各地の方言に見られる。その使用例を見ると、山中六彦（1967）『新訂山口県方言辞典』に次のような用例が見られる。「是は本物とまっついだ」(p.292、なお、傍点は筆者による加点である)。この場合、格助詞「と」が用いられている。そうすると、津堅島方言においても、tuはmattatʃiと結合するだろうと考えられるが、自然傍受では、上記１例しかその例を得ていない。おそらく、「～と似ている」という場合には、-ɲi nisuɲという表現が一般的なのだろう。その結果、mattatʃiはあまり用いられないと考えられる。そこで、質問調査で確認を行った。すると、ɲiとtuの両方が結合し得るとのことであった。

ただし、「似ている」にɲiのみが共起することは注目してよいだろう。自然傍受ではtuと結合した例を見出していない。ɲiが「似ている」に共起することは、次のように考えることができるだろう。すなわち、「(Aハ) B＋ɲi＋nisuɲ」という文型において、発話者の意識はBにある。文例 ja:mi inagunujaɲi ɲisugaja:. を見てみる。これは、「あなた、女親に似ているね」という意味である。発話者にとって、「女親」は既知の存在であり、自分の既知情報がまず表現の中心にあると言えるだろう。そして、初対面の「あなた」を「女親」

に寄り添わせていくという構造であると言える。言い換えると、「女親」が表現の主となり、「あなた」が従であるという関係のもとに両者があると言える。

4．juka、tu、ɲiの相関関係

まず、三者に共通することとして、比較基準を表示する機能として働く場合、三つの助詞に結合するのは、形容詞や状態性動詞、状態性を表す名詞（句）などのいわゆる非動作性語彙と結合するということが挙げられる。「非動作性」ということでは共通するが、その形態は形容詞、動詞、名詞（句）と様々であり、これらを動詞との結合関係のみに言及し、動詞の意味性質に関わらせて、それぞれに共起する格助詞の機能の違いを論究することは適切な手法とは言えないだろう。特にjukaは動詞とは結合しないので、tuやɲiと同レベルで考えることは不可能である。ただし、tuとɲiについては、動詞との結合が見られ、それぞれに結合する動詞の性質に違いがある。そこで、tuとɲiについてその機能差を以下にまとめる。

① tuは「同価値」「同等」の意味を担う動詞と結合する。

② ɲiが承接する比較基準の対象は既知情報を表現の中心に据える働きを持ち、新出情報を既知情報に寄り添わせる。

③ tuとɲiの性質として次のことが考えられる。tuは並列機能に代表されるように、二つ以上のものを一つのものにまとめようとする意識がある。また、対立関係にあるもの動詞をつなげることも可能である。一方、ɲiはtuと違い、やや動的な性質を帯びている。列挙の用法に見えるように次へつなげる意識がある。

④ 上記のtuとɲiの性質が比較基準を表示する機能の場合にも見られる。すなわち、tuが表示する「同価値」「同等」（または「非同等」）はA＝B（またはA≠B）ということである。一方、ɲiは主従関係を持ち、比較基準Bに話題Aが寄り添う関係であり、BにAが引きつけられるという点で動的な意識を有していると考えられる。

5．まとめ

以上、比較基準を表示する格助詞juka、tu、ɲiに注目して、それぞれの機能を分析考察してきた。その結果、それぞれの格助詞の機能を明らかにすると同時に、格助詞はそれぞれが一様な発達を見せているわけではないということが指摘できるだろう。jukaは動詞と結合関係を結ばないという独自の発達を遂げ、その結果、比較基準を表示する機能を特化させている。tuは動詞以外にも名詞（句）との結合関係を結ぶことで、並列機能に準ずる機能を比較基準を表示する機能に残している。それは、tuの原初的な姿であるとも言える。また、ɲiはその性質に動的な意識を有している。これは、例えば、「taro:ɲi kitaŋ／タロ

ーニ　キタン．／太郎にあげた。」「su:zu:ɲi adʒikituruba:te.／スーズーニ　アジキトゥルバーテ．／（お年玉を）スーズーに預けているわけ。」などの「あげる」「預ける」などの移動性動詞が結合する対象表示機能などに通じるものである。

以上のように格助詞juka、tu、ɲiがそれぞれに独自の機能を有し、比較基準を表示する機能の一端を担っている。jukaのように比較基準に特化したものやtuのように原初的な機能を残して働くものなど、そのあり方は混在している。しかし、混在しているように見えて、それぞれの助詞が特有の機能を持ち、比較基準を表示する機能の中で棲み分けていることがjuka、tu、ɲiの相関関係の特徴の一つであろうと考える。

注

注1　「ヨリ」「ト」「ニ」の機能の説明において、「比較の基準」此島正年（1966）、松村明編（1969）、「比較の標準」橋本進吉（1969）という表現が多く用いられる。また、次のような記述も見える。

> 通時的に用法を見ると、起点・手段を示す点では「から・で」と比較の基準を示す点では「に・と」と、場所を示す点では「を・に・から」と重なり、「より」独自の用法はなくなつたと言える。
>
> 土井忠生（1958）、p.46

> 構文のかなめとなり、主語や目的語の機能をはたす文法格として、「ガ／ヲ／ニ（与格）」があり、他の格形式よりも優位にある。この文法格をとりまくかたちで、広義の場所格としての「ニ（位格）／カラ／へ」と、基準・移動・対象・比較などの抽象的な関係をあらわす関係格としての「ニ（依拠格）／ト／ヨリ」がある。
>
> 仁田義雄、村木新次郎、柴谷方良、矢澤真人（2000.9）pp.79-80

以上より、「ヨリ」「ト」「ニ」が比較基準を表示する機能において、何らかの相関関係を有しているということは指摘できるであろう。

注2　格助詞の「に」と「と」の本質的な違いに言及した研究は、山田孝雄をはじめ多くの研究者によってなされている。その主なものを以下に記す。

> 「に」は性質資格の變更等、専、内面的のものに使用し、「と」は状態の如き外的の變更を示す。この故に「に」は絶待的のものに使用し、「と」は多く相待的のものに使用す。
>
> 山田孝雄（1954.4）p.449

> 下の動詞の主観的内容を指示する用法に於て「と」がまさり、客観的に状態を指定して下へ連続する用法に於て「に」のまさる　　此島正年（1953.1）p.61

注3　津堅島方言では、ŋkaに比較基準を表示する機能を見出していないが、他の地域では津堅島方言のŋkaにあたる格助詞が比較基準を表示する機能を持っていることが諸研究者によって記述されている。その例を以下に挙げる。

> ウヌ　ックヮー　ウヤンカイ　ニチョーン（この子は親に似ている）

〈那覇方言〉野原三義（1986.2） p.68

ʔuri kwa:ja ujanakai ju: nitʃo:ŋ（この子は親によく似ている）

〈久米島方言〉野原三義（1986.2）p.126

[kunukkwa:ʔ ujaɲkai nitʃo:n]（この子供は親に似ている）

〈那覇市前島方言〉内間直仁、新垣公弥子（2000.3）p.220

[ʔunu kkwaja ʔujakai nitʃo:n]（この子は親に似ている）

〈渡嘉敷方言〉内間直仁、新垣公弥子（2000.3）p.236

以上の用例だけでははっきりと断言することはできないが、カイ系の助詞が比較基準を表示する機能として働くのは、沖縄本島の中南部方言の特徴である可能性は考えてもいいと思われる。

注4　格助詞「ヨリ」は動作・経過の場所や起点を示すのが基本的な機能であることが度々指摘される。その例を以下に記す。

語誌的に見ると、動作、経過の場所や起点を示すのが基本的な意味である。起点を示す用法が心理的な価値関係や論理的な判断に転用されると、③の意味になる。[（補注）③の意味とはすなわち、比較の基準を示すの意味を指す。]　鈴木一彦、林巨樹編（1985.4）p.132

連用的用法のうち、比較の標準を示すものは起點をあらはすものから出たのであらうととおもはれる　橋本進吉（1969.11）p.152

注5　格助詞「と」の並列を表示する機能は万葉集に既に見えることが山田孝雄や橋本進吉らによって明らかにされている。そもそも、「と」は、指示の意を持つ「そ」や「さ」と同根であり（s－tの音韻変化）、また、「とかく」「とある家」などの「と」と関係があるとされる。（小林好日（1936.9））その説に関連して、「と」の連体的用法について、鈴木一彦、林巨樹編（1985.4）では、次のように説かれている。

「－と（＝ソレ）－と（＝ソレ）」というように、上の語を「それ」と示して体言の下に一つずつ附属するのが本来の用法である。　鈴木一彦、林巨樹編（1985.4）p.127

「と」の格助詞としての用法は上代において既に、連体的用法、連用的用法ともに確立されている。しかし、諸機能は同時的に成立したのではなく、後世になって獲得した機能も存する。橋本進吉（1969.11）においては、比較の標準の機能は、上代においてはまだなかったと説かれている。すなわち、「と」の比較基準を表示する機能は「と」の諸機能の中でも新しい機能であると考えられる。

注6　「おなじ」という語はもとは「～におなじ」というように格助詞「に」をとるのが一般的であったが、次第に「～とおなじ」というように格助詞「と」をとるようになり、今日では、「～とおなじ」の用法が「～におなじ」より一般的である。それについて、阪倉篤義編（1971.9）において、次のように説かれている。

もとある事物が「不変にして同一である」ことを意味した「おなじ」という語が、二つの事物が「対等にして同種である」ことを意味する方向へと意味変化（意味の拡大）をとげたことをしめすものであって、用いられる格助詞が修飾的な「に」から判断的な「と」へと変じたの

も、そういう「おなじ」という語の意味変化の結果であると解される。

阪倉篤義編（1971.9）p.19

注7　現代標準日本語において「コーヒーに紅茶にジュース」というように二つ以上のものを列挙する働きをもっている。ただし、津堅島方言において、このような列挙表示にはkaraが用いられ、ko:çi:kara ko:ʧakara ʤu:sukara（ただし、列挙するものの最後のものに関しては、ʤu:suʃiとʃiが結合することが多い）というように表現される。karaは起点の意識を有しており、ɲiよりも次へつなげる意識は高いと言える。また、karaとʃiの呼応関係には注目すべきものがある。これについては、機会を改めて論じることとする。

注8　鈴木英夫（2001.3）を参照。動詞「似る」と共起する「に」と「と」の違いを次のようにまとめている。

「似る」と共起する場合のニとトの違いは、ニが二つの事柄の客観的な類似を指摘するのに対し、トは表現主体の主観的な把握に基づく類似を指摘すると言える。

鈴木英夫（2001.3）p.51

参考引用文献

内間直仁（1994.2）『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院

内間直仁、新垣公弥子（2000.3）『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房

生塩睦子（2001.3）「沖縄伊江島方言の格助詞」『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』（「環太平洋の言語」成果報告書　A4-001）

国立国語研究所編（1963.4）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

国立国語研究所編（1989.6）『方言文法全国地図』第1集　大蔵省印刷局

此島正年（1953.1）「助詞「に・と」の相関－万葉を主として－」『国語学』第11輯　pp.55-63　武蔵野書院

此島正年（1966.3）『国語助詞の研究』桜楓社

小林好日（1936.9）『日本文法史』刀江書院

阪倉篤義編（1971.9）『講座国語史　第3巻　語彙史』大修館書店

鈴木一彦、林巨樹編（1985.4）『研究資料日本文法　第7巻　助辞編（二）　助詞・助動詞辞典』明治書院

鈴木英夫(2001.3)「格助詞と動詞－「～に似る」と「～と似る」を中心に－」『日本語学』第20巻　第3号　pp.44-52　明治書院

尚学図書編（1989.3）『日本方言大辞典』小学館

土井忠生（1958.4）「格助詞－の・が・な・つ・だ・い・を・に・と・へ・より・よ・ゆり・ゆ・から・て－」『國文學　解釈と鑑賞』第23巻第4号　pp.27-49　至文堂

中本正智（1983.4）『琉球語彙史の研究』三一書房

仁田義雄、村木新次郎、柴谷方良、矢澤真人（2000.9）『文の骨格』岩波書店

野原三義（1986.2）『琉球方言助詞の研究』武蔵野書院

橋本進吉（1969.11）『助詞・助動詞の研究』岩波書店

平山輝男他編（1992.6）『現代日本語方言大辞典』第２巻　明治書院
松村明（1969.4）『古典語現代語　助詞助動詞詳説』學燈社
山中六彦（1967.10）『新訂山口県方言辞典』マツノ書店

付　記

本稿の執筆にあたり、江端義夫先生から懇ろなご指導を賜りました。また、学部時代から九年間という長きにわたって、先生には学問のみならず、様々なことをお教えいただきました。記して感謝申し上げるとともに、先生のご健勝をお祈り申し上げます。

― またよし・さとみ、本学大学院教育学研究科博士課程後期在学 ―